
玉蘭神

荊姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

玉繭神

【Nコード】

N4869C

【作者名】

荊姫

【あらすじ】

世界を二分する巨大な二つの国家。その間で絶えることなく続く戦いの中心にあったのは、「玉繭神」と呼ばれる存在だった。そして戦いによって生きる場所をも失った少女は、やがて「玉繭神」を巡る争いの渦に巻き込まれてゆく…

序章

序章

1 ,

赫い血

夕間暮れ

飛び交う 白と黒の翼

世界は狂気に 染め上げられ

声の無い 悲鳴を上げる

絡繰りに彩られた 祈りと願いは

虚無と 真実を 秩序と 背理を

月下の闇の 奈落に沈め

なべて 夢幻と為す

2 ,

細い透明な糸のような雨が潜々と降る夜。彼女は深い森の中で、

目を覚ました。夢を、見たのだった。

夢には、戦のために焦土と化す前の、平和だった頃の故郷が出てきた。彼女を庇って死んだ両親も、夢の中では笑顔で暮らしていた。思い出すと、余計に失ってしまった日々を取り戻したくなる。失ってしまったものの大きさを、自覚してしまう。それは言いようのない寂しさと虚無感を運び、彼女をひどく苦しめた。

彼女は両親を亡くした後、生まれ育った村を追われた。戦で荒れ果てた村には、幼い彼女一人の食い扶持すらも大きな重荷となるからだった。

ある日、村の大人に連れられて山に入った彼女は、暗い森の中に置き去りにされた。村への帰り道も分からず途方に暮れているうち、やがて夜になり、彼女は空腹と寒さに耐えながら一夜を過ごした。

朝がくると、彼女は助けを求めて山を歩き回った。ひもじくなれば、木の実を食べ露を飲んで凌いだ。そうやって一日じゅう歩いても、ただ延々と深い森が続いているだけで、村に帰りつくことはおろか下山することもできなかった。

そうして数日を経た今、彼女の疲労は極限に達し、立ち上がることもできなくなった。そのうえ冷たく降りそそぐ雨は、徐々に幼い身体から体温を奪う。

彼女は、死を覚悟した。恐怖は無かった。寧ろ優しかった両親の許へ行けるのだと思うと、願わしくすらあった。

おかあさん、おとうさん…

心の中で両親を呼び、その笑顔を思い浮かべる。もうあの寂しさと虚無感に苛まれることもなくなるのだと思うと、追憶することは苦痛ではなかった。

やがて彼女はゆっくりと、再び深い眠りに落ちていった。

つづく

第壹章

1、

見渡す限り一面が、焦土と化した大地。かつて建ち並んでいた家々は瓦礫となり、緑豊かだった山野は黒い焦げ跡を残して綺麗さっぱり、消えて無くなってしまった。

空を映したように蒼い瞳の少女は悲しげに、かつて自分が暮らした村を見つめる。

見事に何もかもが消え去っていた。幼い頃に遊んだ緑野も黄金色の麦畑も、今は見る影もない。

累々と転がっている屍は風雨に曝され、骨ばかりとなっていた。瓦礫の海に置き去りにされた骸骨かたいくの虚ろな眼窩は、何を見つめているのだろうか。

今となつては、分かるはずもない。

世界は『玉繭神たままゆがみ』を巡り二つの巨大な国家、アルミナ帝国とヴァルザ央国に二分されていた。数十年に及ぶ長い戦乱は甚大な被害を生んだ末、一時停戦というかたちで一応の終息を迎えた。戦禍の爪跡と、癒えることのない悲嘆を残して。

「…ティアリス様」

名を呼ばれて、蒼い瞳の少女は傍らに佇む女を見遣る。

「もう、帰りましょう。これ以上は」

これ以上は、ただ苦痛を増すだけ。そう言わんとしているのだとは、ティアリスにも分かった。

「…うん」

答えた声は、自分でも驚くほどに弱々しい。傍らの女も心配そうにティアリスの顔を覗き込む。

その様子を察して、ティアリスは言った。

「大丈夫、平気よ。早く帰ろう」
踵きびすを返し、もと来た道に戻る。振り返らないように、俯かないように。

小走りになりながら、荒れ果てた故郷を後にした。

2、

ティアリス「ダルクローズは、『玉繭神』の巫女だった。十数年前に両親を亡くし、心ない村の大人たちに山の中に置き去りにされた彼女は、『玉繭神』に救われた。『玉繭神』の神託を受け巫女を捜していた神官たちによって、死にかけていた彼女は助けられ、巫女に据えられた。

しかし巫女になって十年間、ティアリス一度も『玉繭神』なるものを見たことはなかった。

アルミナ帝国にもヴァルザ央国にも属さない、第三の国家とも呼ばれる聖地。『玉繭神』の巫女は、その聖地にある神殿で暮らしていた。

神殿の一室、石造りの堅い壁に覆われた部屋。一つきりしかない小さな窓に寄り添うようにして、『玉繭神』の巫女もといティアリスは眼下に広がる街並みを眺めていた。

「…随分、変わったよね」

感慨深げに呟く。

ティアリスが巫女となつたばかりの頃は、この聖地も戦乱の被害を受け、ひどい有様だった。彼女の故郷ほどではないものの、復興するのに長い年月を要するだろうことは容易に想像がついた。それが十年を経た今では、この街が戦火を被ったとは思えないほどに復興している。元の街がどんな様子だったかを知らないティアリスの目にも、それは明らかだった。

「この街は、強いわ」

「ティアリス様がいらつしやるからですよ。巫女がこの聖地にいらつしやるのだと思えば、自然と人々も復興に向けて意欲が増します」

「そう、なのかな…」

ティアリスは言いながら、ゆつくりと振り返る。其処には、巫女の側仕えの女性神官がいた。

「それにティアリス様がいらつしやるからと、帝国政府からも中央政府からも多大な資金援助がなされたんですよ。巫女様はいらつしやるだけで役に立っているんです。何もなさらなくても、ね」

「…えらくはつきり言うのね。わたしは巫女として、そんなに無能なの？」

「巫女様のお役目は、『玉繭神』を現世うつしよに導くこと。それが未だに『玉繭神』のお声を聞いたことも無いなんて、私でなくとも失望しますよ。でもそれ以外は、ご立派にお役目を果たしておいでです」

神官は苦笑しながら皮肉る。彼女は鳶色の瞳と赤茶色の長い髪も美しい華奢な女性だが、侮ってはならない。彼女、ミレーナ「エリアーダスは、聖地と巫女を護衛するため結成された神官騎士団の副団長だった。弱冠十六歳にして副団長の座にまで登りつめたというミレーナの実力は、伊達ではない。

「…できることなら、わたしだってちゃんと巫女の役目を果たしたいのに」

「お気になさらないで下さいよ。いつか時が満ちれば、お役目を果たせる日が来ますから」

優しく明るい、朗らかな笑顔。ミレーナのその屈託のない笑顔に、どれだけ慰められてきたことだろう。

ティアリスは巫女に就任して以来、背負わされた期待に押し潰されそうになることがよくあった。巫女に就任したばかりの頃は特にそうだった。まだ六つという年齢的に幼いこともあり、自分より年上の大人たちから期待されることが苦痛だった。

そんな時、ミレーナが巫女の世話係兼護衛としてティアリスの前に現れた。ミレーナは神官騎士団の副団長という地位にありながら、ティアリスに対し構えることなく接してくれた。軽口を叩くこともあれば、先ほどのように皮肉をいうこともある。けれどそれは悪意から言っているのではなく自然に接しているゆえのことだとは、ティアリスにも分かった。

「そうだね。けどそのいつかが、八十歳のお婆ちゃんになる前だ
といいな」

「ええ、全く」

そう笑い合ったが、実際のところ、それはティアリスの本心だった。寧ろどんなに老いても、役目を果たす日が来るほうがまだましだ。その日が来ないことだってあるかもしれない。

ティアリスはミレーナから視線を逸らすと、再び聖地の街並みを見下ろした。綺麗に整備された、平和な街並み。

それがよもや自分のために崩れ去るとは、ティアリス自身も思ってもみないことだった。

つづく

第3章

1、

聖地、と呼ばれるその場所は、かつては水も涸れ果て緑も生い茂ることの無い、不毛の土地だったという。しかしある時から其処は、聖地と称されるようになった。神殿が建設された年である。その年を境に、この地は肥沃な大地へと変じた。これを人々は『玉繭神』の恵みという。だが実際のところ本当かどうか確かめる術はない。しかしこれが偶然でないことは、誰の目にも明らかだった。

神殿の内部は、一様に暗い。所によつては白昼から灯りを点していたりする。それは神殿に窓が殆ど無いことに起因しているのだが、その理由を知る者は神官長の他にいない。当の神官長は神殿に窓が異様に少ない理由を防犯のためだと言い張っているが、この話を信じている者は神官の中にもいない。

その日は神官騎士団の入団式があつたためティアリスは珍しく、神殿東部の区画にある神官騎士団の兵営を訪れていた。いつもは兵営の雰囲気は厭で滅多にこの場所を訪れることはないのだが、入団式ともなれば巫女が出席しないわけにもいかない。

薄闇の中、松明の煌々とした炎だけが唯一の灯りだった。広い室内に、松明はたった四つだけ。しかも窓らしき窓はない。壁に沿って小さな四角い穴が幾つも空いてはいるものの、明かり取りの役割は殆ど果たしていない。もともとそんな役割を持たせる気もなかったのだらう。

ここは神官騎士団の兵営の中でも最も広い大広間で、同時に神殿内で最も暗い場所だった。

「……」

ティアリスは暗い室内に満ちる異様な雰囲気^きに吞まれて身動き一つできず、大人しく椅子に座っていた。心なしか、気分も悪い。

「巫女様、どうなされた？辛そうなお顔をなさっておいでだが」
訊ねたのは、隣に座っていた団長のアーネスト「ウォールステインだ。」

「何でもないよ。平気」

「それならば良いが……」

彼は一見、とても騎士などには見えないような優男^なのだが、実力はかなりのものらしい。そういった点ではミレーナもアーネストも似ていたが、性格は正反対だと噂に聞いていた。ティアリスも実際に彼に会うのは儀式や何かのときぐらいで、私的な会話は殆どしない。

正義感に溢れていて神官長への忠誠心も篤い一方、融通が利かず厳格。ミレーナや神官たちのアーネストに対する評判は、あまり良くない。ただ若い神官たちからの支持は圧倒的だった。

若い神官たちがまるで狂信者のように彼に尽くしている様子、ティアリスにはそれが滑稽に見えた。

強すぎる正義感や忠誠心は、時に狂気の如く人を盲目にするもの。己の信じる正義の為に、犠牲を払うことも厭わなくさせるほどに。

そうして気付いたときには、道を外れてしまっている。

アーネストの狂気は全てを巻き込んで、道を外れようとしていた。

2、

入団式が終わったあと、ティアリスはミレーナと共に神殿の中庭で談笑していた。他の多くの騎士たちも中庭に雪崩れ込み、一時その場は宴会場と化した。幸いなことに厳格な団長アーネストは神官長の許へ行っているため、叱るものはいない。仕舞いにはどこからか

酒肴を持ち出してきた者もいて、そのうち本当に宴が始まってしまった。

ティアリスは賑やかな饗宴の中、一人きりでぼつんと立ち尽くしていた。ミレーナは神官たちと飲み比べをしているため、側にはいない。その上ティアリスはこういった賑やかな場には慣れておらず、どうしたものかさっぱり分からない。

そんなとき、ティアリスは彼を見つけた。

血のように赫い瞳と、真っ黒な髪。年の頃はティアリスとそう変わらないようなのに、どこか大人びて冷めた表情をしている。

ティアリスはその少年を遠目に見た瞬間、奇妙な既視感と同時に言いようのない恐怖感を覚えた。胸の奥が不安でざわめいて、息が止まりそうになる。

ティアリスは必死に恐怖を抑え、近くにいた神官を呼び止めて問う。

「…あの、あそこにいる彼は？新しい団員か何か？」

「…巫女様、それよりミレーナさんがすごいんですよ。酒豪つてやつですかね。三人抜きですよ」

神官は敢えて問いを無視したように見えた。

「話しを、逸らさないで」

できるだけ強い口調で言い放つ。慣れていないせいか威厳はないが、それは功を奏したようだった。

「…巫女様、あいつには関わらない方がいいですよ。あいつは鬼神の子なんだそうで…」

神官は恐る恐る語った。

彼はアルミナ帝国とヴァルザ央国の戦乱で両親を亡くした孤児だった。故郷の村は焼き払われ、彼以外の村人は皆殺しにされた。しかし幼かった彼は鬼神のごとき恐ろしい力で、自分を殺そうとした

軍の連隊を壊滅に追い込んだ。その後、恐ろしがられて引き取り手のいない彼の噂を聞きつけたミレーナが、彼を引き取って養育したのだという。

「ミレーナが…」

それを聞き終えて、ティアリスは驚きと共に呟いた。

ミレーナに彼の話を聞いたことはなかった。一度もそのようなことを、言っではいなかった。

隠していた理由は分からないが、きっとアーネストか誰かに危険視されて彼の存在を隠していたのだろう、と神官は付け加えた。

ティアリスはあの少年がひたすらに恐ろしくて、ミレーナを中庭に残したまま自室に戻った。

黄昏の残照が差し込む窓辺に佇み、静かに息を吐く。

なぜ初対面の彼が、あんなに恐ろしかったのか。そもそも顔も見なかったのではない彼に、なぜ既視感を覚えたのだろうか。それともどこかで一度、^{まみ}見えたことがあったのだろうか。

そんな風に悶々としているうち、やがて夜が来た。

ティアリスは気分が優れないと言って夕餉^{ゆじゆげ}も食べず部屋に閉じこもり、誰も入ってこれないように鍵を掛けて眠った。

夜半、ティアリスは窓から差し込む弱々しい月明かりで目を覚ました。早くに眠ったためか頭は冴え渡ってしまい、再び眠る気にはならない。

仕方なくティアリスは眠るのを諦め、書棚から本を取り出し窓辺の椅子に腰掛けた。

見上げると、窓の外には星の海が広がっている。どうやら今日は満月らしく、真ん丸い白銀色の月^{しろがね}が微笑むように聖地の街並みを照らし出している。

「…」

無言で月を見上げていた、その瞬間。

黒い巨大な影が、月を横切った。錯覚かと思ったが、それは二度三度と現れる。大きさからして鳥ではない。しかもよくよく目を凝らして見れば、それは巨大な狼の姿をしていた。背には蝙蝠のような翼が生えている。

異獣、と、ティアリスは小さく呟いた。

異獣は人間に仇なすものとして、古来より存在してきた。その起源も生態も、何もかもが謎に包まれた種族だが、彼らは人間の肉を糧として生きている。ゆえに人間の側は彼らを敵と判断している。

異獣に理性はないが、中には言葉を解し知恵を持ち、楽しみとして人間を喰らうものもいるらしい。しかし大抵はただの猛獣に等しく、その行動理由も食糧を追い求めるがために過ぎない。

だが彼らにもたつた一つだけ、掟が存在する。それは聖地を侵さないことだ。聖地に異獣は現れない。だから『玉繭神』の巫女はこの聖地の神殿に暮らすよう義務付けられている。

けれど月明かりに浮かぶあの影は、紛れもない異獣。ティアリスは暫く呆然として、空を翔けてゆく異獣を見つめていた。

するとその背中に、見知った人影があるのを見つける。

それは、あの赫い瞳の少年だった。

つづく

第参章

1、

『玉繭神』の巫女と呼ばれる女性は今までにも数多く存在してきた。しかし実際に『玉繭神』を導くことのできたのは、初代の巫女のみだった。巫女の選定は神官長を通して『玉繭神』が神託という形で行い、巫女の辞任もまた神官長と『玉繭神』の手に委ねられている。巫女は次の巫女が現れると辞任するというが、そのときがいつになるかは一定しておらず、誰にも予想がつかなかった。

任が終るまで巫女は聖地を離れることは滅多に許されず、時には一生の大半を神殿で暮らすよう余儀なくされる場合もある。巫女の中にはそんな人生を送ることを拒み、任から逃れるために死を選ぶ者もあつた。家族すらも庇ってくれないのでは、逃れる方法は死しかないのだ。

ティアリスの一代前の巫女、ヘレナ「ウォールステインも、そんな悲劇の道を選んだ女性だった。

ヘレナは、兄と病弱な母親と三人で、ヴァルザ央国の首都で生活していた。父親はヘレナが生まれた直後に戦死してしまったため、母親は子供二人を養おうと必死に働いた。その結果、兄がやっと家計を支えられるほど稼げるようになる頃には、母親は過労がたたって寝込んでばかりいるようになった。

ヘレナが巫女として聖地に招請されたのは、そんな時期だった。

「兄さん、私は」

巫女を招請すべく送られてきた書簡を兄に見せると、ヘレナは表情を曇らせて呟いた。母親にはまだ、報せていない。衝撃で病が更に悪化してしまうと考えたためだった。

だが兄はあまり、衝撃を受けている様子はない。

「…すごいことじゃないか。ヘレナは巫女様になるのか。生きてたら父さんもきっと、喜んでただらうな」

ヘレナの言わんとしたことを察してそう言ったのか、それとも単に聞こえていなかっただけなのか。

ヘレナとそっくりな碧い瞳と金髪を持つ青年は、満面の笑みを浮かべていた。

「…そうね」

もうこれ以上、何も言えない。少なくとも兄は反対するどころか、引き留めたいとも思っていないようだ。

それがヘレナには悲しかった。

数日後、ヘレナは聖地から巫女を迎えにきた神官たちによって、聖地へと連れて行かれた。母親には結局、巫女となることも告げられず別れの言葉一つ言えなかった。兄には一応、別れを言っておいたが、やはり悲しむ様子も別れを惜しむ様子もない。ヘレナはとうとう兄に本心を話すことのないまま、聖地へ向かった。

だがヘレナは、兄に宛てて書き置きを残した。

言えなかったことや、どうしても伝えなかったこと。涙で滲んだ文字が、ヘレナの思いを物語っていた。

書面には、彼女が幼い頃から兄に対して恋慕の情を募らせていたことが書かれていた。けれどそれは兄妹の間にあつてはならぬ忌まわしい感情と知り、今まで隠し続けてきたのだ、と。

兄は後でそれを読み、驚きと共にひどく後悔した。なぜもっと早くに妹の思いに気付かなかったのかと、さもヘレナが巫女になることを喜んでいる風に振舞った己を恥じた。

巫女ヘレナが自害したのは、それから半月ほど経った頃だった。報せを受け取った兄は聖地に行き、妹の亡骸を引き取った。流石

にこの時ばかりは、母親にもきちんと事情を説明した。すると意外なことにも、母親はヘレナの身に起きたことを察していたという。

「『玉繭神』の巫女様だとは分からなかったけれど…もう戻ってこないことぐらい、分っていたわよ。実の娘のことですもの」

そう言われて、兄は心の中で動揺した。何でも分かってしまうのなら、もしかするとヘレナの秘めていた思いにも気付いていたのではないか。

しかしそれは遂に分らないまま、二年後に母親は死んだ。

ヘレナの兄、アーネスト「ウォールステイン」というと、妹の死に対する悔恨から巫女を守護する神官騎士団の一員となっていた。

2、

ティアリスが異獣に乗る赫い瞳の少年を目撃した翌朝、聖地は騒然とした空気に包まれていた。

しかし原因は彼ではない。彼が異獣に乗っているのを見たという者は、神官の中にも一人としていなかった。

ではこの騒動の原因は何事かというと、神官騎士団の叛逆だった。神官騎士団のアーネスト団長と多数の団員が、神官長に叛旗を翻したのだった。

「ティアリス様、起きてください!」

ミレーナの声で目を覚ましたティアリスは、そこで初めて叛逆の話を知った。ミレーナは以前からアーネストを怪しんでいたのだというが、起こってしまったことは仕方がない。

「神官長はとつくに避難されました。ティアリス様も早くお逃げになってください」

「…ミレーナは？逃げるんでしょう?」

ティアリスが問うと、案の定ミレーナは首を横に振って言う。

「いいえ。私は残っている団員たちと、団長を足止めします」

ミレーナは足止め、と言った。敵うはずなど固もより無いと分かっ

ているからだ。

ティアリスは何かしてミレーナを説得しようとするも、彼女の決意を曲げることはできなかった。

「後のことはグレンに任せます。まだ新米で頼りないところもあります。命を張ってもティアリス様をお守りします。だから安心してください」

ミレーナは言って、部屋の扉の方をを振り返る。

其処には、誰かがいた。ティアリスは厭な予感がしていた。見覚えのある赫い瞳が、遠目に分ったからだ。

「…グレンです」

無愛想に言ったのは、昨日の異獣に乗っていた少年だった。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4869c/>

玉繭神

2010年10月21日20時38分発行